

# 高等学校 芸術科音楽 学習指導案

指導者 原 寛暁

## 1 題目設定・教材・授業のねらい

- 日時** 平成28年10月15日(土) 第2限(10:35~11:25)
- 場所** 第1・第2音楽教室
- 学年・組** 高等学校I年 芸術科音楽選択クラス(ア) 計49人(男子21人, 女子28人)
- 題目** 生徒が自主的に進める合唱活動 –リーダーの育成を柱として–
- 目標**
1. 生徒が自ら課題を発見, 評価し, 合唱表現を高めていく態度を養う。
  2. 楽曲の特徴を捉え, 適切に表現に結びつけていく力を伸ばす。
  3. 自分達の演奏を鑑賞することで, 客観的に演奏を分析することができる。
- 教材** ツェーザー・フライシュレン詩, 信長貴富訳, 信長貴富作曲  
「くちびるに歌を」混声合唱とピアノのための

### 指導計画 (全5時間)

- 第一次 歌詞(ドイツ語が含まれる)を読み込み, その意味を理解する。参考演奏を鑑賞し, パート別の音取りを行う。パート練習・全体練習の進め方を理解する。<2時間>
- 第二次 生徒主体の練習システムの定着を進める。参考演奏をより深く聴き込み, 楽曲の特長把握と, 練習アプローチの方法を工夫させる。<2時間(本時はその2時間目)>
- 第三次 自分達の演奏を客観的に深く聴き込み, 合唱の仕上げを行う。<1時間>

### 授業について

高等学校学習指導要領 芸術科音楽Iの目標に、「ア:曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り, イメージをもって歌うこと。エ:音楽を形づくっている要素を知覚し, それらの働きを感受して歌うこと。」とある。授業での合唱活動は, そもそも能動的な学習であるといえる。しかしこれまで、「主に授業者が指導・評価を行い, 生徒はそれに従って活動を行う」というのが一般的なスタイルであり, 生徒リーダーを設定し補助的に役割を持たせるにとどまっていた。今回の取り組みでは, 研究テーマである「アクティブ・ラーニング」の視点に着目し, 授業の指導・評価などの各場面をできるだけ生徒の主体的・能動的な活動に変化させ, 授業者は生徒の活動を支援する方向に転換する, 実験的な授業実践の試みである。取り組むにあたって留意したのは, 「生徒の主体性に丸投げ」するのではなく, 「何を学習させたいのか」「より効果的な手法の指導」などの側面を, 授業者としてしっかりと「手綱を取る」ということである。芸術科教育の大きなテーマである「生涯学習につながる活動」という視点を明らかにした, 意義ある取り組みとしたい。

## 2 学習指導案

### 本時の学習目標

1. 前時の自分達の演奏を客観的に鑑賞し, 意見交流を通して成果と課題を発見, 設定できる。
2. 自ら設定した課題を解決し, 演奏レベルを向上させることができる。

### 本時の評価規準(観点/方法)

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の技能と 創意工夫
生徒リーダーを中心として, 成果を発見し課題を設定し, 効果的に練習を進めることができる。 /生徒観察・板書・パート別ワークシート	歌詞を読み込んだり, 楽曲分析することによって, 曲想にふさわしい技能の向上と, 表現の工夫を深めることができる。/生徒観察・録音記録

### 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価
<導入> ・本時の内容確認 ・前時の録音を聴く (5分)	・鑑賞しながら、楽譜に「徐々に良くなってきた点」「本時の課題」として気づいた点を書き込む。	・鑑賞するポイントを、予め提示する。 (歌詞・声の響き・表現の幅・パートバランス・音程やハーモニー・フレーズ処理 など)
<展開> ・パート内で、課題の共有 (7分)	・パート別に話し合う。 ・配布されたワークシートに、リーダーがポイント別に成果と課題について意見をまとめる。 →発表し、全体共有。 →本時のパート練習課題の設定。	→机間・各パート巡回指導、授業者は適切な助言を加える。  ・成果と課題の板書、整理  ↓
・生徒指揮者による本時の全体課題の提示 (3分)	・本時の課題（生徒指揮者提示）を、全体共有する。→授業者のアドバイスと共に、楽譜に書き込む。	・授業者は、課題解決のための効果的な方法などの助言を行う。
・各パート練習 (15分)	・各パートの練習場所に移動。 →パートリーダーの進行で、設定された各パート課題を解決する練習。 ・元の場所に帰ってくる。 ・生徒指揮者による全体練習。	・授業者は巡回し、適切なアドバイスを加える。(主体的に進めようとしているか)
・全体合唱練習 (10分)	→具体的な指示があれば、楽譜に書き込む。 →特に気になる箇所は部分練習。	・授業者は、適切なアドバイスを行う。
<まとめ> ・通し録音  ・次時の内容確認 (7分)	・生徒指揮者、生徒伴奏者による通し録音	・練習の成果を生かし、指揮に集中して意欲的に歌唱しているか。 ・次時に録音を鑑賞し、さらに合唱を深めることを連絡する。
備考・準備物：前時の合唱録音CD、PCMレコーダー、成果課題整理のためのワークシート5枚 教材楽譜の予備、ホワイトボードマーカー（黒2・赤1・青1）		

### 3 反省と課題

音楽科教育が目指す育むべき力、つまりは生涯学習につながる姿勢と心情を育むことを大切にしたい、と常日頃から考え授業実践を行ってきた。今回の取り組みでは「生徒達が主体的に音楽を創り上げようとし」「自己評価を行い」「課題設定・解決方法を編み出していく」態度や力を育むことこそが、学校教育を離れた後にも自らの意志で芸術活動を深めていこうとする態度を養うことにつながると仮

説を立て、実践した。今回の取り組みは生徒達の主体性に焦点化し、それをどこまで突き詰めることができるのか、という実験的な試みであった。生徒達は実に意欲的に向上心を持って、難易度の高い教材に取り組んだ。このような態度は、恐らくどのような楽曲に発展していこうとも維持される姿であろうと思われる。

反面、課題としては生徒達が主体的に創り上げようとする部分と、授業者が積極的に教え伝えていくべき部分とを、どのようにバランスを取っていくべきであったのか、ということにある。どちらかに偏りすぎても、生徒は力を発揮できない。しかしながら（主に技術面の）上達への効果的な方策の提示や知識面の確認については、（実践してみて明らかになったことであり当然と言えば当然のことではあるが）授業者が手綱をとらねばならない場面はやはり多かった。そして、教師主導で積極的に生徒を引っ張ることに対してやや消極的になる授業者自身としての姿に気づくことになった。音楽教育に携わっていく限りこの「バランス感覚」は永遠の課題と思われるが、この課題意識を今後も持ちながら日々の授業実践を積み上げたいと考える。